

巻頭言 未来をデザインする「社会システム企業」へ



代表取締役社長
滝澤 光樹

インテックは1月11日、おかげさまで創立50年の節目を迎えることができました。これもひとえに多くのお客さまに支えていただいたからこそ深く感謝申し上げます。

1月11日は、北陸地方で漁業に従事する人々が年明け初めて舟を出す「起舟の日」。インテックの前身「株式会社富山計算センター」はこの日、社員17名で情報産業という荒海に漕ぎ出しました。“この海原は未知ではあるが、そこに明るい未来が広がっている”ことを確信し、インテックは進取の精神を持って進路を切り開いてまいりました。

振り返ってみますと、1985年の通信自由化においては業界の先陣を切って旗振り役となりました。創業以来目指してきた「コンピュータ・ユーティリティ」の実現のためには、通信の自由化が不可欠であったからです。

通信事業の立ち上げにあたっては、インターネットの前身ARPANETの技術を商用化した米GTE Telenet社と提携、国内に基幹網の構築を始めました。さらに独自の通信機器を開発・配備し、民間初のパケット通信網「Ace Telenet」を完成させたのです。その通信網を用いた日用品雑貨業界や食品業界における業界EDIの実現などは、まさにイノベーションというべきものでした。

一方、富山の自治体や地元企業に支えられて創業したインテックには、自治体や病院、金融などの業務を学び、そのノウハウを全国に展開してきた歴史があります。公共的な分野にも強みを持つからこそ、社会を支える新たなITシステムを提案していく知恵と技術を持つと自負しております。

サービス化、クラウド化の勢いが加速する今、目指してきたコンピュータ・ユーティリティ社会が現実のものになるようにしています。インテックはより豊かで安全な暮らしを実現するために「クラウド」や「ビッグデータ」に積極的に取り組み、高齢化や食の安全、健康、農業など新たな分野への挑戦を始めています。

新しいことに挑戦する「進取の気質」は当社のDNAです。新たな50年を歩み始めたインテックは、未来をデザインし企業や産業、社会の付加価値を向上させる“社会システム企業”へと成長を続け、インテックだからこそできるサービスをこれからも社会に提供してまいります。

さて、本ITJは、1974年に第1号が「研究紀要」として発行され、その後、「INTEC Technical Report」、「INTEC TECHNICAL JOURNAL」と改名して現在に至ります。第1号から40年、その間通算71号を発刊し、論文総数は670編に達します。これらはインテックのみならず日本の情報技術の発展史であり、技術立社を標榜するインテックの知的資本蓄積の証でもあります。この蓄積の上に、これからも新たな技術と経験を重ね、さらに皆さまのお役に立つよう努力してまいります。

※注：コンピュータ・ユーティリティ
電気やガス、水道のように、いつでも、どこでも、誰もがコンピュータの恩恵を受けられること。